

福井県指定文化財の新指定について

福井県文化財保護審議会から、下記の 10 件の文化財を福井県指定文化財に指定することについて答申がありました。詳細は別紙資料のとおりです。

種 別	文化財の名称	所 在 地	所有者（管理団体）
1	建造物 にかいどうほくさんじんじゃほんでん ほういでん 二階堂白山神社本殿および拜殿	越前市二階堂町16-5	宗教法人白山神社
2	けんぼんちゃくしよくあみださんぞんらいごうず 絹本著色阿弥陀三尊来迎図	越前市京町2丁目1-8	宗教法人しょうがくじ 正覚寺
3	けんぼんちゃくしよくほいざんもんほんぜんじぞう 絹本著色梅山聞本禅師像	あわら市御簾尾10-12 みすのお	宗教法人りゅうたくじ 龍澤寺
4	けんぼんちゃくしよくりゅうたくじさんそぞう 絹本著色龍澤寺三祖像		
5	もくぞうしょうかんのんぼさつりゅうぞう 木造 聖 観音菩薩 立 像	勝山市平泉寺町平泉寺64-57 (辻観音堂)	いぬい かずと 乾 一與
6	せきぞうこまいぬ えいしょう 石造狛犬 (永 正 十二年銘)	あわら市沢14-1 (春日神社)	沢区
7	せきぞうこまいぬ えいしょう 石造狛犬 (永 正 十八年銘)	福井市中手町20-27	宗教法人かばはちまんじんじゃ 樺八幡神社
8	どうくじゃくもんけい 銅孔雀文磬	越前市京町2丁目1-8	宗教法人しょうがくじ 正覚寺
9	だいはんにやきょう 大般若経	越前市二階堂町16-5	宗教法人白山神社
10	無形民俗 文化財 おしまあま すもぐりりょう かこうぎじゅつ 雄島海女の素潜り漁と加工技術	坂井市三国町安島	おしまあまほぞんかい 雄島海女保存会

にかいどうはくさんじんじゃほんでん はいでん
1 二階堂白山神社本殿および拝殿 2 棟

- (1) 所在地 越前市二階堂町 16-5
(2) 所有者 宗教法人白山神社
(3) 時代 本殿 江戸時代中期 (17 世紀後半)
拝殿 文久三年(1863)

(4) 由来・特徴

白山神社は越前市二階堂町に鎮座し、養老元年（717）泰澄大師の創立と伝える古社で、伊佐那美尊を祀る。中近世には山干飯総社白山宮と称し、近郷 48 ヶ村の総社として崇敬を集めた。

本殿は、寛文年間（1661～1672）松岡藩主・松平昌勝の再建と伝わり、正面三間側面二間に向拝を付けた三間社入母屋造銅板葺の建築である。屋根は入母屋造に千鳥破風、向拝に唐破風をつけ、外陣および内陣内部には花鳥図などの彩色が施された装飾的な社殿である。建築様式から寛文頃の建築で、彩色も当初からとみられる。

拝殿は文久 3 年（1863）の建築で、当初神楽殿であったものを大正期に拝殿に改めた。正面六間半、側面二間半の入母屋造棧瓦葺で、開放された中央間とご神体を祀る両脇間からなる大規模な社殿である。

本殿は彩色を施した本殿建築の県内初期の例であり、拝殿は元神楽殿であるが、江戸末期建築の大規模な社殿として県内では類例のない建築である。建築時期は異なるものの、県内における神社建築の遺構として貴重である。



本殿外観



本殿外陣



本殿内陣



拝殿外観



拝殿中央間

- (1) 所在地 越前市京町2丁目1-8
- (2) 所有者 宗教法人正覚寺(浄土宗)
- (3) 法量/時代 縦87.3cm(67.2cm)、横47.0cm / 南宋時代
- (4) 由来・特徴

阿弥陀如来が観音菩薩・勢至菩薩^{せいし}の二尊を率いて、臨終を迎えた信者の元へ来迎^{らいごう}する様子を描いた阿弥陀三尊来迎図である。中央の阿弥陀如来は緑色の裳に赤い衣をまとい、右手は垂下して掌を外に向け、左手は胸前で第1指と第3指を捻じる。観音菩薩は白色の裳に緑色の衣をまとい両手で蓮台を捧げ、勢至菩薩は白色の衣をまとい合掌する姿で描かれる。

赤や緑を用いた色彩や細かい衣の襞、観音・勢至の華やかな瓔珞の表現などは南宋時代仏画の特徴をよく現す。

伝来の経緯は不明であるが、越前国が交易地として繁栄していたことを物語る貴重な文化財のひとつである。



けんぼんちやくしょくばいざんもんほんぜんじぞう
3 絹本 著色 梅山聞本禪師像

1 幅

- (1) 所在地 あわら市^{みすのお}御簾尾10-12
(2) 所有者 宗教法人龍澤寺（曹洞宗）
(3) 法量／時代 縦 97.9 cm 横 39.4 cm ／室町時代
(4) 由来・特徴

永徳二年（1382）に龍澤寺を開いた梅山聞本禪師を描いた頂相^{ちんぞう}である。梅山聞本禪師は室町時代の禅僧で、徳の高さは都にまで伝わっていたという。この頂相は、足利義満が禅師に何度も上洛を求めたが叶わなかったことから、画工を遣わして、密かに禅師の姿を写し取らせたものと伝えられている。寺では「竹杖の^{ちくじょう}御影^{みえい}」として大切に守られてきた。

禅師は、白い内着に青い衣、墨染めの袈裟を着け、白色の足袋、薄青色の沓を履き、左手には数珠、右手に黒色の杖を握り、歩行する姿で描かれている。色彩も美しく、禅師の特徴をとらえて写實的に描かれている優れたものである。

頂相は椅子に座る姿で描かれることが圧倒的に多いが、本画像は歩行する姿で描かれた「^{さんひんぞう}経行像」の数少ない作例としても貴重である。

4 絹本着色龍澤寺三祖像

3 幅

- (1) 所在地 あわら市御簾尾^{みすのお}10-12
- (2) 所有者 宗教法人龍澤寺（曹洞宗）
- (3) 法量／時代 各幅 縦 84.6 cm 横 39.2 cm / 室町時代
- (4) 由来・特徴

龍澤寺の三祖を描いた頂相である。太源宗真^{ちんそう}禅師は梅山聞本^{ぼいざんもんほん}禅師の師、峨山韶碩^{がざんじょうせき}禅師は太源宗真^{ちんそう}禅師の師であり曹洞宗の発展の基礎を築いた僧である。梅山聞本^{ぼいざんもんほん}禅師は龍澤寺開創の際にこの二僧を敬い、自らは開山とならず峨山韶碩^{がざんじょうせき}禅師を開山、太源宗真^{ちんそう}禅師を二世、自らを三世としたため、龍澤寺ではこの三僧を三祖として仰いできた。

三僧とも曲^{まが}杖^{ぼう}に座し、手に拈^{ねん}子^すまたは竹篋^{しつぺい}を持つという共通した姿で描かれており、描法からみて同一絵師により描かれたと考えられる。上部の賛文はいずれも龍澤寺六十四世住職の華覚契^{かかくけいたく}琢^{たく}の手で天文十六年（1547）に書かれている。

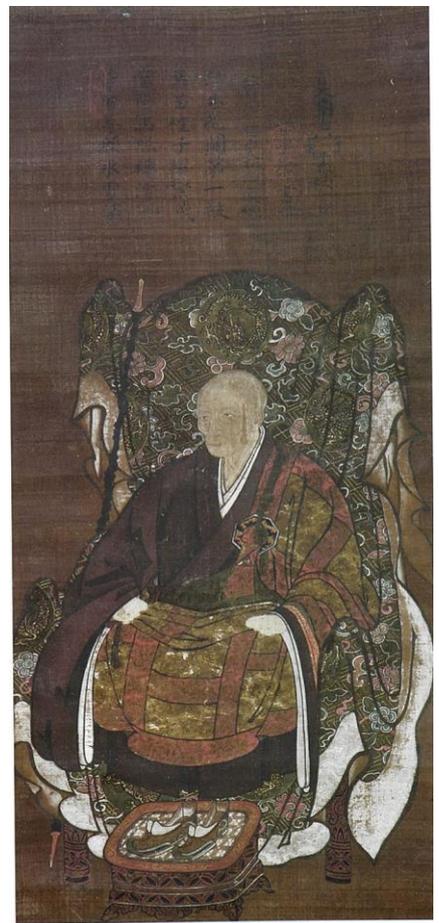
曹洞宗では中世にさかのぼる頂相の遺品が少ないが、没後の作ではあるものの、著名な禅僧の画像として貴重である。



太源宗真禅師像



峨山韶碩禅師像



梅山聞本禅師像

- (1) 所在地 勝山市平泉寺町平泉寺 64-57 (辻観音堂)
(2) 所有者 乾 一與
(3) 法量／時代 像高 103.1 cm／ 平安時代後期
(4) 由来・特徴

本像は辻観音堂の本尊として祀られている聖観音菩薩立像である。かつては平泉寺三十六堂のひとつである観音堂の本尊であったと考えられる。

髻^{もとどり}を結び、右手を屈臂^{くつび}して掌を胸前に上げ、左手は腹前で未敷蓮華^{みふれんげ}をとり、蓮台上^{れんだい}に立つ。頭頂^{あしほぞ}から足柄^{よかわ}までの主要部分をヒノキの一材から彫成する。

この姿は延暦寺横川中堂本尊の聖観音菩薩立像と同じ姿であることから、その系譜をひく像と考えられる。衣端にあまり動きを見せない処理や衣文線などの穏やかな彫り口から12世紀頃の製作と考えられるが、抑揚のあるはっきりと見開いた目や太い鼻梁を持つ鼻など重厚さを備えるのは古風である。

かつて平泉寺に数多く存在していたと考えられる仏像群のなかで、今に伝来する希少な作例として貴重である。



せきぞうこまいぬ
6 石造狛犬 (永正十二年銘)

1 対

- (1) 所在地 あわら市沢 14-1 (春日神社)
(2) 所有者 沢区
(3) 法量/時代 像高 阿形：50.0 cm 吽形：51.5 cm
室町時代 永正十二年 (1515)

(4) 由来・特徴

あわら市沢の春日神社の神殿内に安置されている狛犬である。阿形・吽形の一对で、台座を含め笏谷石の一材から彫出されている。各台座の両側面に銘文が彫られており、永正十二年 (1515) に奉納されたことがわかる。

阿形は口を開けて顔をやや左に、吽形は口を閉じてやや右に顔を向け、台座上で^{そんきよ}蹲踞する。体躯のバランスがよく、たて髪たてかみの卷毛や前脚などにみられる蕨手状の毛の表現、足の指など細かく丁寧に彫出されており、洗練された笏谷石製狛犬の優品である。

笏谷石製狛犬は室町時代から江戸時代末まで盛んに作られたが、本狛犬は現在確認できるものとして最も古い紀年銘を持ち、越前狛犬の歴史を考えるうえで重要な資料である。



吽形



阿形

せきぞうこまいぬ
7 石造狛犬（永正十八年銘）

1 対

- (1) 所在地 福井市中手町 20-27
(2) 所有者 宗教法人樺八幡神社
(3) 法量／時代 像高 阿形：66.7 cm 吡形：65.4 cm
室町時代 永正十八年（1521）

(4) 由来・特徴

福井市中手町の樺八幡神社かばはちまんに伝わる笏谷石製の狛犬である。阿形・吡形の一对で、台座を含め笏谷石の一材から彫出されている。阿形は口を開けて顔をやや左に、吡形は口を閉じてやや右に顔を向けて台座上で蹲踞そんきょする。

阿形は左前後脚の側面に、吡形は右前後脚の側面に銘文があり、永正十八年（1521）に奉納されたことがわかる。現在確認できる笏谷石製の狛犬としては、あわら市沢の狛犬に次いで古い紀年銘を持つ。像高が 70 cm 近くあり、笏谷石製の狛犬としては大型で、表現にのびやかさと量感があり、矮小化していない優れた作風の狛犬である。



吡形



阿形

8 銅孔雀文磬 どうくじゃくもんけい

1面

- (1) 所在地 越前市京町2丁目1-8
- (2) 所有者 宗教法人正覚寺(浄土宗)
- (3) 法量/時代 肩幅17.4cm、裾幅19.0cm、高さ12.3cm
鎌倉時代
- (4) 由来・特徴

磬とは中国起源の打楽器で、日本では主に読経の区切りなどの合図に打ち鳴らす梵音具ぼんおんぐである。

正覚寺に伝わる磬は銅製で、裾が下方にやや伸びて外に反りを見せる山形磬である。両面ともに芯のある複弁八葉蓮華文ふくべんはちようれんげもんの撞座つきざを中心に、左右に向き合う一対の孔雀を鋳出する。孔雀は脚の一方を折り曲げるといふ鎌倉時代初期あたりから流行した表現で、柔らかな肉取りで主翼、尾羽根まで丁寧に表わされている。

箱の蓋裏には、「大正初年武生市大虫出土」と墨書があり、大正時代に大虫廃寺西方の水田から発見されたと伝えられる。

県内に残る古磬の優品として貴重なものがある。



9 大般若経 568 帖 (附 経箱 60 帙 経櫃 3 合)

(1) 所在地 越前市二階堂町 16-5

(2) 所有者 宗教法人白山神社

(3) 員数/法量/時代

大般若経 568 帖 (折本) / 1 帖縦 26.3cm 横 9.5cm 折数 46 折半/鎌倉時代
 経箱 60 帙/1 帙縦 32.8cm 横 42.5cm 高さ約 4.8cm/室町時代
 経櫃 3 合/1 合縦 50.7cm 横 75.8cm 高さ 53.4cm/室町時代

(4) 由来・特徴

大般若経 (正式名称は大般若波羅蜜多経) は、大乘仏教の中核思想を説く一具 600 巻の経典で、仏教の根本経典とされる。

本経は、鎌倉時代に興福寺を中心とする大和国の諸大寺で開板・摺写された春日版である。室町時代に氏子の村々から白山神社へ寄進され、以後は安穩等を祈願するため転読された。県内における春日版の事例として大変貴重である。また、一部の表紙・裏表紙には平安時代に書写された紺紙銀界金字法華経が転用されており、この点は全国的にみても非常に珍しい。

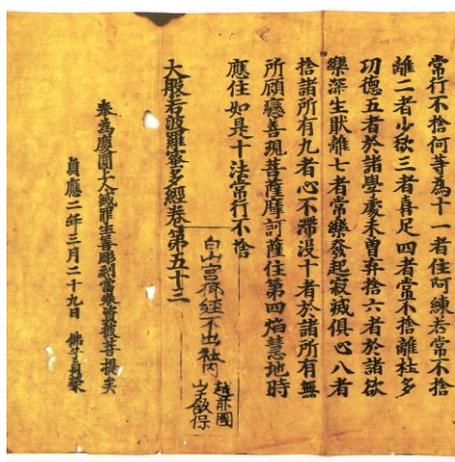
現在、春日版は 552 帖が残り、明治時代の写本 16 帖と合わせ、経箱 60 帙・経櫃 3 合に収納され、白山神社の本殿内陣に安置されている。

大般若経・経箱・経櫃



巻第五三卷末 (春日版)

表紙紙背の紺紙銀界金字法華経



10 雄島海女の素潜り漁と加工技術

- (1) 所在地 坂井市三国町安島
(2) 保存団体 雄島海女保存会
(3) 由来・特徴

雄島の海女漁は、雄島地域の米ヶ脇、安島、崎、梶で行われ、主にワカメ、ウニ、アワビ、サザエを獲り、ワカメ、ウニについては自ら加工している。自ら獲ってきた漁獲物を加工する流れが特徴的である。現在の雄島地域の海女漁には、20代～90代の55人が従事している。

ワカメ漁は主に5月から6月まで。ウニ漁は主に8月。アワビ、サザエ漁は主に6月から10月まで行われ、それぞれ、岩場に近い場所に潜って採取される。主に漁は午前中に行われ、午後は加工のための時間となる。

海女の素潜りの技術は母親や嫁ぎ先の姑から伝承され、独自の海中を指す地名を共有している。

なお、『和名類聚抄』の中に坂井郡海部郷の記載があり、これは現在の三国町三里浜と推定されており、すでに『和名類聚抄』の編まれた10世紀頃には三国町付近に海女あるいは海士が存在していた可能性がある。



ワカメ漁の様子



ワカメの加工（ワカメ干し）



ウニ漁の様子



ウニの身を取り出す作業